

春日部福音自由教会 2021年2月28日 11:00 中央会堂礼拝（同時配信）

聖書 新約聖書 マルコ 1章 12節～15節

説教 「荒野と神の国」 早矢仕宗伯師

今日、私たちが共にここに集まることは大きな喜びではないでしょうか。

今、道を歩けば少しずつ春が近づいていることが目に留まりますね。梅の花が咲いていますし、また、桜というか、私が見ているのはあんずですけども、少し小さな蕾が、これからそれが大きくなって花が咲いて実をつけるのだらうなあ、なんていうことを想像させるような、そんなふうな情景が目に留まります。枯葉をどけてみると新しい緑が芽生えているのを見つけることができます。そんな状況を目にしていると、また今日のような日差しを感じると、なんとなく気持ちがこう嬉しくなってくるというか、気持ちが上がってくるような気がしますけども、それにもまして、今日私たちがこうしてともに集まるということは、そしてともに顔を合わせるということは、本当に大きな喜びはありますけれども、私は不思議だなあと思うのです。また私は毎週ここに来ているわけではないので、皆さんの顔を拝見してね、またちょっと皆さんとは違う感覚を覚えるわけです。皆さんどんな感覚でね、お互いの顔をご覧になっているか分かりませんが、ああいつもの顔だと思ってらっしゃるかもしれませんが、私不思議なのです。もういろんな教会で礼拝のご奉仕させていただきます。そしてその都度、礼拝に集まる方々と顔を合わせるのですけども、その時に何かこう嬉しい気持ちがあるのです。いつもの仲間に出会っているということではありませんけれども、けれどイエス様を信じる者たちが、イエス様を信じる仲間が集まっているってことはそれは大きな喜びです。

I 教会はイエスのからだ

そしてなんと不思議なことに、皆さんにお会いしているということを超えて、イエス様にお会いしているようなそういう気持ちにもさせられる。イエスを信じる仲間たちが集まる場所、そこで私たちはイエス様とお会いするのです。教会はキリストの「からだ」という風に言われております。キリストを信じる者が、イエスを信じる者が集まる場所はイエス様の「からだ」だと思ってしまう。ということはどういうことでしょうか。今私たちはここに集まっているということ、それによってイエス様の「からだ」が目に見えるように現れている。そう考えますと、毎週日曜日というのはとんでもない日になります。イエス様がこの地上に姿を現されるって言うのでしょうかね、目に見える形で現れてくださる日だと、そんな風に言うことができるのではないかと思います。普段の生活の中で、中々私たちはイエス様のことを思い起こすことができないでいる。何かイエス様が遠いところにいらっしゃるかのようになって、私たちは日々の生活を営んでいることが多い。いや、イエス様が遠くにいらっしゃるというふうに思うこともなく、イエス様のことを忘れて生きているってことがほとんどかもしれないですね。本来ならばね、「普段の生活の中でイエス様思い起こして、イエス様のことを思って日々を過ごしましょう」って、できれば良いのですけれども、中々そうはいかないところがあって、一人だと、心細くその信仰の歩みをしているということも多いことでしょうか。しかし私たちはこうして毎週ここに集まって、また今はここに集まるという

ことができなくて、この配信という形でこの中継を見てらっしゃる方もいらっしゃると思うのですが、それもまた一つの所に集まるというか、目を向け、心を向けるということでしょう。そうすることによって私たちは何をしているのか。イエス様を思い起こしている。いや思い起こすということを超えて、私たちはイエス様を見ようとしているのですよね。イエス様を見ているのです。イエス様のその姿を見て、そしてその姿を私たちは心に刻もうとしているのです。毎週毎週繰り返す。

II イエスの歩みに重ねる

今は受難節に入っております。

イエス様が十字架に向かって行かれた。そして、いのちをお捨てになった。そして三日目によみがえられた。そのことを私たちは思い起こす。いや思い起こすということを超えて、私たちはそのイエス様の一步一步の歩みに、自分の歩みを重ねて行こうとしている。受難節というのはまさにそういう期間です。教会はそのように毎年毎年繰り返す暦を定めて、そうして私たちの心にキリストを刻もうとしている。でもただそれは記憶に留めようとしているのではなくて、私たちの一步一步の歩みが、まさにこのキリストの一步一步の歩みと重なっていくようにしようとしている。そしてそれは1年やればそれで済むという話ではない。2年すればそれで済むということでもない。3年4年5年、いやもう10年20年30年と、重ねて、重ねて、重ねていながら少しずつ少しずつ、イエス様の歩みと私たちの歩みが重なって行く。まあ私も、何年重ねてきたかっていうと、信仰をもって（計算が得意ではないのですが）、18の時に信仰をもって、今55になりましたので何年なのでしょうね、私はもうずいぶんたったなと思うのですけれども。それでも、私よりも先輩のキリスト者の方々がここにはたくさんいらっしゃいますから、私がそう言うのは何ですけども、それでも、まだまだ及ばない、重ならないっていうところを私たちは思っております。私たちの願いは、イエス様とその歩みが本当に一つになるように、私たちの生きるということと、イエス様の生きるということがひとつになるように、そんなところで私たちは信仰の歩みを続けている。そしてまたこうして毎週ともに集まっている。主の姿をもう一度ここで思い起こそうとしている。

III 荒野と神の国

「それからすぐに御霊はイエスを荒野に追いやられた。」

御霊が、聖霊がイエス様を荒野に追いやられた。荒野。神不在と言われるところ。サタンが神から引き離そうと試みてくる場所、人にとって何の役にも立たない見捨てられた場所、何の实りもない不毛の地。神はどこにいるのかという呻きと叫びの満ちた場所。希望を失った場所。

私たちのこの生活の場には、所々に荒野があります。緑豊かな草原が続くかと思えば、ふとしたところに荒野がある。時々そういう光景を目にするのではないのでしょうか。どっか観光に出かけて緑の綺麗な場所に行って、「ああ綺麗だな」と思って眺めていると、ふっとその脇に随分荒れたと思えるような場所がある。ゴミ溜めのようにになっている場所があって、はっとさせられることがあります。荒れ果てていて目を背けたくなるような場所が。

以前カナダのバンクーバーというところに、ちょっとした研修というか学びのような形で出かけて行きました。その時にバンクーバーの中心の街っていうのでしょうかね、そこに出かけて行った時のことです。とっても洗練された都会の街でしたけども、その街をバスに乗って移動しました。そういう街がずっと続いて、「すごい都会だなあ」と思いながら、「綺麗な街だなあ」と思いながら見ていたらですね、パッとその場所が、華やかで賑わう都会のすぐ隣の、道を一本隔てたというか、通りを通り過ぎただけで、ガラッと変わったのです。道を一本隔ててすぐその場所が、それまできれいな服を着たスーツ姿の人や、そういった綺麗な格好したビジネスマンのような人たちや、観光客のような人たちが歩いている場所が、パッと変わって、貧しい人たちが、もう服もボロボロで、もう着ているか着ていないかわかんないような姿の人たちが溢れている。まあいわゆるスラムという場所、ほんと道を一本隔てるだけなのです。通りが変わっただけでそういう場所になる。そこは以前、日本人のコミュニティがあった場所だって言われています。昔映画にもなりました。そこは、今はもうそういった日本人のコミュニティがあるわけではない。でも昔からの日本語学校みたいな場所があったりしますけれども、今そこはそういうホームレスの人たちや、いろんなアルコール中毒や麻薬中毒の人たちが集まるような、そういう場所になっている。まあ本当に驚きましたね。そんな華やかな洗練された都会のすぐ隣に、そういう荒れた、まあ荒れたって言い方がいいのかちょっと私も分かりません。まあ不思議なことですけどもそこで見た印象というのは荒れ果てていながらも、少し人間味があるようなそんな印象もちょっと受けたものですから。それでもどちらが良いか悪いかは別としても荒野だと思えるような場所というのが、私たちのすぐ日常の中に潜んでいる、存在しているっていうこと、すぐ隣にそういう場所があるのだっていうことに少し思いを向けさせられるわけです。

ふとしたところに荒野がある。どんなに表面が綺麗に整えられて豊かに見えたとしても、私たちのこの内側に深く入り込んでいった時に、そのたましいの情景は、あなたの日常の情景は、荒涼とした荒野が続いているかもしれない。神を見失い、愛に飢え渴き、傷ついて倒れている、人々が目を背けたくなるような光景が私たちの中に潜んでいる。私たちは着飾って、まあ着飾るほどに飾っているかどうかというのは、それぞれにあるでしょうけれども、でもある意味装ってこのように集まっています。傍から見れば、ああ満たされた人たちだ、ある意味豊かな人たちだと、そう言われるかもしれない。けれどもあなたはよく知っている。私の、私自身のたましいの情景を。その生活のありのままを知っている。「どうしてこんなことがあるのだろうか」、「いつまで私はこの苦しみを背負っていかなければならないのだろうか、この煩わしさを抱えていなければならぬのだろうか」と。「こんなものあっても仕方がないではないか」というような荒野が私たちの中にある。そういうものを私たちは抱えながらまたここに集まっている。「いつか、この荒野から出て来て、たましいの安らぎを得よう」、そんなふうにしてここに座っているかもしれない。まあこんな話をすると、先生言わないでくださいよって。「今は荒野のこと思い出したくないのです」、「これからまた荒野に帰って行かなければならぬなんて考えると-----」って。そんなふうにするかもしれないけど。

イエス様は、聖霊に強いられて荒野に導かれた。今日私たちが開いているこの聖書のマルコの福音書は、「御霊はイエスを荒野に追いやられた。」と記しています。 追いやられたって言葉がなんとも言えない響きを持っていますね。勇ましくイエス様が荒野に出向いて行かれた、って言うのではないのです。「追いやられた」って。イエス様も行きたくないと思われた。そこに追いやられて行った、強いられて行った、連れて行かれたと。荒野にわざわざ行く人はいないのです。

「40日間そこにいてサタンの試みを受けた」。読めば読むほど不思議だなと思うのです。荒野、神不在の場所。神不在の場所に神の子が連れて行かれた。そしてサタンの試みを受けた。どういうことなのだろうって改めてこの聖書を読む時に思うのです。神不在の場所に、神の子が連れて行かれて、そこに留まって、サタンの試みを受けた。どうしてこんなことになったのだろう。神不在と言われる場所に神がおられる。荒野に神がいる。そこに留まってサタンの試みを受けておられる。そこから事を始めようとしていらっしゃる。

マルコの福音書は『福音のはじめ』と、そのように宣言して、このストーリーを始めています。福音が始まった、良い知らせのはじめと語りだして、この主イエスの物語を始めています。そして洗礼を受けられた後、「すぐに、荒野に導かれた」と。イエス様はここから始めようとしていらっしゃる。いや神様が、ここから始めようとしていらっしゃる。荒野から始めようとしていらっしゃる。

私たちはどこかでこの「荒野」と「福音の始まり」というのを切り離して考えています。荒野が終わって、はいテスト終わり。合格。だからイエス様が活動をお始めになった、と。でもこのマルコ福音書は「荒野の物語」と「福音の物語」を切り離していない。

今日この12節から15節を読んでいただきました。13節から14節に少し転換が起こっていますが、でもまったく別の話とはなっていない。続いているのだからそんな印象を受けます。

「荒野の出来事が終わりました」、「そしてイエス様がいよいよ福音の宣教を始められました」って言うよりも、むしろその一つの流れの中で、荒野があり、そこから始まってイエス様が「時が満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と、働きをお始めになっている。神不在の荒野で、神の子が福音を始められた。

このマルコの福音書は、（他の福音書でもこの荒野の出来事は出てきますけれども）、実に簡潔に本当に簡単にこの荒野の物語、出来事を記していますね。他の所だと、いろんな試みがあって、どんなふうに戻られたかとかってところが少し出てきてね、私たちはそこから多くのことを学ぶことができます。私なんか一番印象深いのは、40日断食して「石をパンに変えろ」って言われて、それに対してイエス様が「人はパンのみにて生きるのではない」と仰ったって言う、このことは印象に残っていますけれども、そういったことは一切書かない。不思議だなと思います。どうしてマルコはこのことを書かなかったんだろうか。ある人は知らなかったのではないか、そう言う人もいますけども、でもそうではない。わざわざ書かなかったのですね。それはここで知らせることはなかったのです。マルコがしようとしていたことは何か。その荒野の出来事の内容だとかそこ

での出来事の意味だとかそういったことを伝えようとしていたのではないのです。マルコがしようとしていたのは、荒野に導かれてそこにいるイエス様のお姿を見せようとしているのです。「イエス様が荒野にいる」。「イエス様が荒野にいる」。「そこに留まって、野の獣とともにいて、天使が彼に仕えていた」。

「イエス様が荒野にいる」。イエス様は荒野を遠くから眺めていらっしやっただのではないのです。またそこは忌むべきところだから、足早に通り過ぎようとしていらっしやっただのではないのです。「ああ荒野だ、いやだいやだ、あんまり近づかないでおこう」と言って、遠巻きに荒野を眺めながらそこをさーっと去っていったのではないのです。

留まられたのです。住まわれたのです。

40日、まあ口で40日ってというのは簡単です。40日か、1,2,3,・・・って数えればあっという間に40なんて数えられちゃうわけですね。40日ってあっという間だと。

でも実際に40日生活するってそんな簡単な話ではないですね。まあ受難節は、40日間、復活祭まで色々にそれぞれにレントの過ごし方ってあって、皆さんどんな風にお過ごしになっているかわかりませんが、私も一つのレントの期間の過ごし方っていうのがありましてね、去年ぐらいから、少しチャレンジしているのですけども、断食っていうのを少しやろうと。この歳になってから断食って、40日何も食べないのではないのですね。一応伝統的なやり方があるってね、1日一食、それを6日間、日曜日は外して。日曜日を外して40日なのです。日曜日は大丈夫、食べていいっていう話になって、でも6日間を1日一食で過ごす、それをやっている。それをやるとね、40日って遙か彼方に思えるのです。1日はあっという間に過ぎると思いますけどね、1日一食で過ごすってね、もう本当にね、いつ1日は終わるのだろうって。お昼ごはんだけ食べるっていう風になっているのですけども、お昼ごはんが楽しみでしょうがないのですが、食べた後ね、1日長いのですね。まだ夜にならない。夜になってもなかなか寝付けませんからね、まだ朝が来ない。朝が来たって昼まで食べられませんからね、まだ昼にならない、という話になってね。それを40日って、随分な話だなと思うのです。40日って短くないのです。

40日荒野に留まった。そしてサタンの試みを受けた。けれど耐え抜いて、イエス様はそれに打ち勝ってくださいました。私たちは荒野におられるイエス様の姿を見るのです。それはどんな姿なのでしょう。私たちはそれを見て何を感じるのだろう。でもこの福音書の記者は明らかにその姿を見せようとしているのです。荒野に私たちの主がおられる。そこに留まっておられる。荒野、見捨てられた場所。神不在の場所。サタンが住み私たちを試みる。飢え、渇き、苦しみ、絶望に疲れ果て、やさぐれた心、私たちが目を背けたくなるようなたましいの暗闇。そこにイエス様が来られた。そこにイエス様がおられる。イエス様は天使に支えられ、野の獣とともに暮らしていらっしやっただ。そこでイエス様はサタンを退け、疑いの雲を晴らし、荒野に光をもたらし、荒野に神の声を響かせた。

「時が満ち神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」 荒野が荒野でありながら荒野でなくなってしまう。この後私たちは見るのです。イエス様が時に荒野に退いて祈っていらっしや

る姿。35節を見ますと、イエス様が忙しい最中であって「朝早く、暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行って祈っておられた。」と書かれている。寂しいところっていうのは、これは荒野なのです。

私たちの荒野。神がおられないかと思えるようなたましいの暗闇、誘惑と苦しみに満ちた場所、あなたがこれから帰って行こうとするところ。そこにイエス様が来てくださった。イエス様は今日私たちの荒野におられる。荒野を神の国にしてくださっている。私たちは荒野にイエス様を見つけるのです。

祈りましょう。

主よ、あなたはどこにおられるのですか、そんな風に思える出来事が私たちの日々を覆っています。私たちは日々、荒野を生きています。けれど主よ、あなたはそこに来てくださいました。そこに留まって下さいました。そこで祈ってくださいました。そしてそこであなたは言うてくださいました。「神の国が近づいた。」 あなたが来てくださいました。あなたがおられるところが神の国。主よ、どうぞ私たちの目を開かせてくださって、私たちの住まうところにおられるあなたに、心を向けさせてくださって、あなたとともに荒野を生きることができるよう支えてください。主イエス・キリストによって祈ります。 アーメン